

光瀬龍

紐育、宣候



KADOKAWA NOVELS

昭和20年8月、日本の原爆搭載機が
アメリカ本土へ出撃した!
太平洋戦争をめぐる迫真の歴史SF!



ガクカワパブルズ

昭和五十九年九月二十五日初版発行

著者 光瀬龍 みつせりゅう

発行者 角川春樹

ニューヨーク ようせう
紐育、宜候

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社宮田製本所

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見一三三 振替東京三一九五〇八
〒一〇三 電話 営業〇三二三八八五二 編集〇三二三八八四五一

光瀬龍

紐育、宜候



KADOKAWA NOVELS

昭和20年8月、日本の原爆搭載機が
アメリカ本土へ出撃した!
太平洋戦争をめぐる迫真の歴史SF!

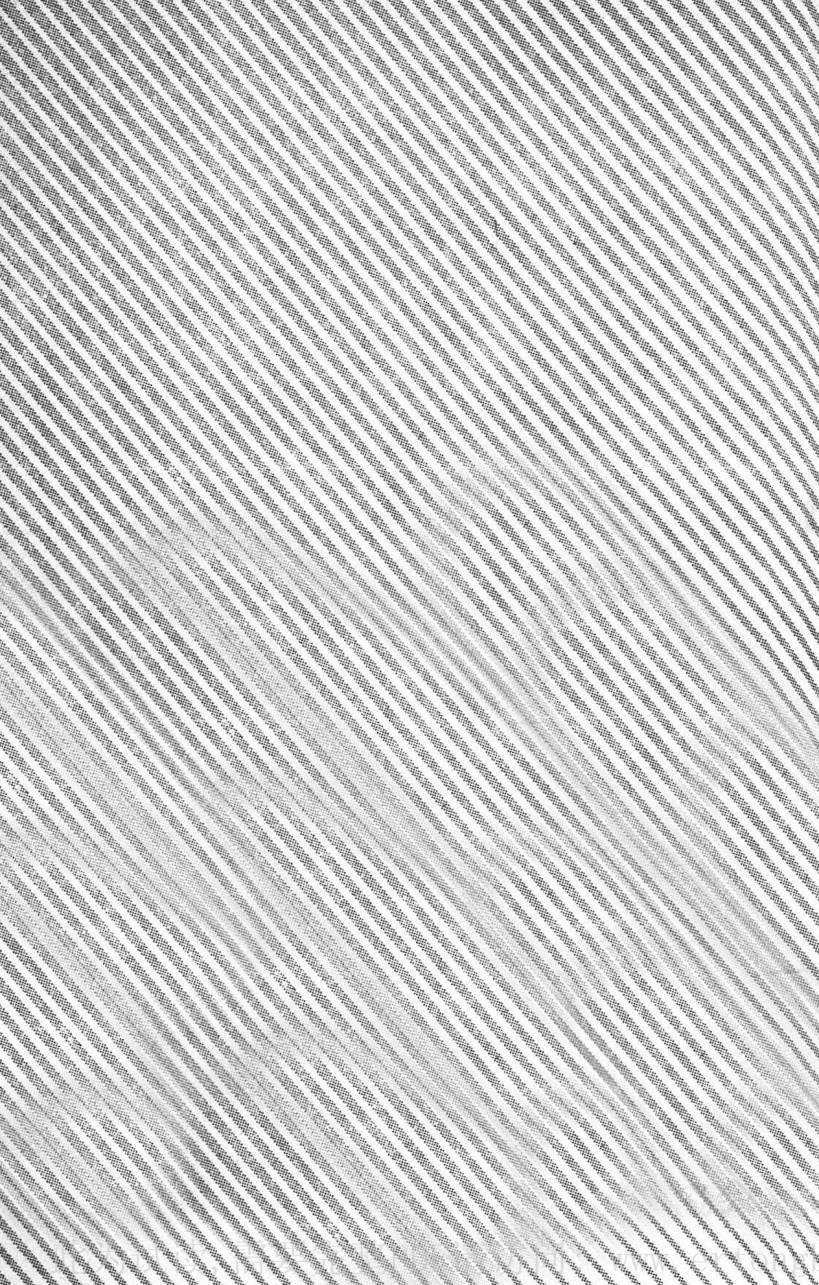
SF作家のことは

歴史は無数の《i-f》で成り立っている。別な見方をすれば、われわれはつねに、それが《起つてしまった》世界にいるわけだ。そして、このようにならなかった

もうひとつの世界が、平行して存在しているとしたら――

これはSF作家だったら、誰でも一度は書いてみたい魅力に満ちたテーマであろう。

略歴 一九二八年東京生。東京教育大卒。日本SF界の草分けとして、現在も第一線で活躍中。



KADOKAWA NOVELS

ニユー・ヨーク
よつ
そふ

紐育、宣候

光瀬 龍

一九四二年六月三日。午前三時二十分。ミッドウエイ島では小さな地震を感じた。

だが、この朝、ミッドウエイ島にあったすべての人々は、軍人であろうがそうでなからうが、戦闘準備に忙殺されていて、このかすかな地震を感じることはできなかった人は、ごく少数であった。

また、同島のアメリカ海軍気象台の地震計係の職員も、構内に高射機関銃陣地を設けた海兵隊に、地震計を設置してある建物のそばで大槌を使わぬように、苦情を言おうとして席を立った間のことだったので、地震計の針は、グラフ用紙の置かれていない台の上を、むなしく往復するばかりだった。

その地震は、オーストラリア大陸のクイーンズランド東部海岸、グレート・バリアー・リーフにのぞんだ小港マッカイでは、この地方では近來にないゆ

れをもたらした。といつても、被害らしい被害もなく、わずかに舟溜りの防波堤に立てられた標識灯の三角形のやぐらが倒れただけであつた。その標識灯も、日本の小型潜水艇が湾内に侵入するのを防ぐために、何か月も前から点灯されることなく、うち棄てられていたものだった。

漁業組合書記のムリロ・ラウバホイホイは、標識灯がこわれたことだけを記録しておいた。

シベリア大陸を北流するエニセイ川の支流、ツングースカ川の広大な流域は、はげしい地震にゆれ動いた。とくに、川の右岸の、ツングースカ河谷における木材集積の中心地ともいふべきツラの町は、戸数六百のほとんどが倒壊した。同時に発生した山火事によって被害は激増し、高熱の上昇気流によって生じた巨大な積乱雲は、はるか四五〇キロメートルも離れたツルハンスクの町からも遠望することができた。

だが、ソビエト・ロシアは、この時期、ヨーロッパ

バにおいて侵入してきたナチス・ドイツ軍と、はげしい戦いをくりひろげていた。この独ソ戦争の山ともいうべきスターリングラードの攻防戦が、このひと月後におこなわれようとしていた。

その混乱の中で、ツンゲースカ地方の地震の報告は、中央部の誰によっても記憶されることはなかった。

ただ、ヤクート自治共和国の首都ヤクーツクの氣象台の記録には、その日は一九四二年六月四日と記されている。

南アメリカ・ペルーの、エクアドル国境に近いタララの町の郊外に、国籍不明の大型機が墜落し、爆発炎上したため、町の一部と隣接する農場を焼失した。飛行機の残骸からは十数個の黒焦げ死体が発見されたが、調査の結果、それらはいずれも小柄な東洋人のものと断定された。

機体の残骸の一部から、銘板の破片が発見された。それには、あきらかに「NAKAZIMA」と読み

取れる刻印があった。

かけつけた警官の一人は、熱い灰の中から見馴れない小銃をひろい上げた。

海岸警備隊の隊長は小学校の校長でもあり、銃器の研究家でもあった。彼は、警官によってもたらされたこの小銃を、丸一日かかって調べた末、おそらく、三八式歩兵銃であろうと語った。

この事件は、その後ペルー当局によって厳秘に付され、タララの町の人々も口にするのを極力避けた。

この日が一九四二年六月四日であったことを記した石碑が、聖・マリアンヌ公館の裏庭に建てられている。

一九四二年の五月から六月にかけて、世界各地で極光が観測された。

とくに六月三日の夜、カスピ海に面したソビエトのトルクメン共和国から、イラン、イラクにかけての、広大な地域で見られた極光は、多彩な美しさと

奇怪な光輝とで、その地方に住む人々を戦慄せしめた。鳥はめしいとなつて壁や塀にぶつかり、家畜は暴走してとどまる所を知らなかった。

一九四二年六月三日。午後十一時過ぎ、イギリス空軍の戦闘機隊司令官タウンディング將軍は彼の指揮する防空戦闘機隊のために、デハビランド・ドラゴン・ラビード機に乗つて、高度五〇〇〇メートルの上空から、ロンドン市周辺に配置されたサーチライトの、連携照射の検閲をおこなつていた。突然、機長のプリマスロック大尉が、おどろきのさけび声を發した。彼の指し示すままに、機体の窓から下界を見おろした將軍は驚愕した。眼下のロンドンの市街は、松明のように燃えていた。その時刻、イギリス沿岸各地の対空監視哨は、英国本土に侵入中か、あるいは侵入しているいかなる種類のドイツ機の存在をも報じていなかった。急遽、もよりの基地に着陸すべく、ラビード機は降下したが、二分後、大火災は消滅し、ロンドン市は、もとの灯火管制下の暗

闇にもどつた。

その後、タウンディング將軍は、この夜のできごとに関しては側近のごく少数の者にしか語らなかつた。その一人、副官のシドニー・K・シエクスピア少佐は、彼の私的な勤務日誌の中に、タウンディング將軍の体験を書きとどめておいた。

一九四二年四月十九日。この前日、日本各地は、日本本土近海まで迫つたアメリカ航空母艦『ホーネット』から發進した十六機のノースアメリカンB25爆撃機の空襲を受けた。

十九日にも東京周辺の地域には警戒警報が發せられていた。

東京の郊外に住む中学生、千葉護介は、この日午後二時半頃、アメリカ海軍の艦載単発爆撃機、プリュースターSB A-1あるいはカーチスSB2Cとと思われる機体と日本陸軍の九七式戦闘機との空中戦を目撃した。

当時の戦況から不審を感じた彼は、戦後、航空雑

誌その他を通じて、目撃した情景の解明に役立つ証言ならびに参考意見を求めたが、寄せられた回答は皆無だった。

1 — B

染めたような青い大海原はそのまま大空につらなり、水平線を見定めることは困難だった。

空と海との間には、かなり厚い団雲の層があり、編隊が雲の上をかすめると、新雪の肌のような雲の表面を、ドーントレスの影が矢のように走った。

「VB-3。VB-3。左一五度。日本艦隊主力部隊。攻撃せよ！」

どこか見えない所を旋回している戦場統制官が、ようやく戦場に到着したあらの爆撃隊を、声を枯らして敵艦隊の上空へ誘導する。

空母ヨークタウン搭載の第三爆撃飛行中隊VB-3の、ダグラスSBD3ドーントレス艦上爆撃機三十三機は、渡り鳥のむれのように翼をかたむけて大

きく旋回した。

「バックギャモンより各小隊へ。前方の雲の切れ目から突っ込む。戦闘隊形はカテゴリ13。グッド・ラック！」

隊長のクラレンス・マクラスキー少佐の甲高い声が、イアホーンの中でひびいた。語尾がおさえようもなく震えていた。

第三小隊編隊長のウイリアム・ハザウェイ中尉は、思いきって操縦席の風防をいっばいにあげ放った。

風防を開いたまま急降下することは、ふだんはかたく禁止されていた。だが、これから、爆弾をかかえて日本艦隊に向って急降下してゆくというとき、少しでも視界をひろくしておきたかった。それにまだ上って間もない太陽の、低い角度からの陽光が、風防ガラスに予期しない反射光を生み出すのではないかと思った。

ふしぎなことにおそろしくZEROの姿はどこにもなかった。

あくまでも青く澄んだ空には高射砲弾の煙ひとつ

見えなかった。

——この雲の下で、ほんとうに戦いがおこなわれているのだろうか？

ハザウエイ中尉の胸に、ちらと疑惑がわいた。

ほんとうに静かではないか。こんな静かな朝に、ほんとうに戦闘がおこなわれているのだろうか？

「中尉！ 中尉！ 遅れますぜ。どうせ、やられるなら早い方がいい」

後部座席のエイモリ兵曹がさげんだ。

ハザウエイ中尉は、はっとわれにかえった。二、三秒の間、虚脱していたようだった。

「OK！」

ハザウエイはペダルを踏み、操縦桿を深くかたむけた。

同時に、急降下制動板を兼ねる穴あきフラップをおろし、プロペラの可変ピッチを浅くした。

機体は一瞬、逆立ちの姿勢となった。

「タリホー！」

ハザウエイ中尉は、雲の切れ目をくぐって、弾丸

のように突っ込んだ。

雲の下へ出ると、信じられない世界がひろがっていた。

海も、空も、どす黒く染っていた。

海面や空中でやたらにピカピカと何かが光っていた。

真下に、おそろしく大きな船があった。

船尾から純白の航跡がのび出し、右に、左に大きくくねって大蛇のように海原いっぱいに渦巻いていた。モーターボートのようなスピードで突進しているらしい。

ハザウエイは、自分の機が、ねらわなくともその船に機首を向けているのに気がついた。

体を石のようにちぢめ、操縦桿を握りしめた。

すさまじい音響がハザウエイと彼の機体を押しつつんでいた。

風防の縁で、主翼の前縁で、無線アンテナ柱で、切り裂かれる大気がごうごうとうなりを上げていた。しぼったエンジン音。機体の震動音。さらに何と

も知れぬ激しい打撃音。

それらがひとつになり、入り乱れて鳴りひびいた。機体の上下左右を、長さ数十センチもある野球のバットのような細長い火の玉が、滝をさかさまにしたように、たえまなく噴き上ってくる。

それは、下から射ち上げてくる敵の機関砲弾で、一発でも命中したら、ドーントレスなど瞬時にばらばらに分解してしまふ。

命中しないのがふしぎだった。

五秒。十秒。十五秒……

ドーントレスは急降下を続けた。

とつぜん、眼下の大きな船から、真赤な閃光がほとばしった。

閃光のあとから、褐色の煙や純白の水柱が突き上ってきた。

ハザウエイのドーントレスは、その煙と水柱の頂点へ突っ込んでゆくとしていた。

「中尉！ 生きているか！ 引き起せ！」
後部座席の兵曹が絶叫した。

ハザウエイは力いっぱい操縦桿を引いた。

右手の親指が反射的に操縦桿の爆弾投下スイッチを押していた。

一瞬、目の前が真暗になった。

ハザウエイは、おそろしい力で座席に押しつけられた。

頭が肩にめりこむ。

両腕が肩から抜け落ちたような気がする。

横隔膜が、押しつけられた内臓ではちきれそうにふくれ上った。

強烈なGが、ハザウエイの肉体も、ドーントレスの機体をも、ひとつに押しつぶそうとする。

機体が今にもばらばらに分解してしまふかのよう激しく震動した。

ばらまいた砂を真向から浴びたように、機体に、重いなにかが多量にぶつかってくる。

十秒。二十秒。三十秒……

うっすらと周囲が見えはじめた。
だが夕闇のように暗い。

おれは目をやられたんだ！

ハザウエイは恐怖で気が遠くなった。

背後から火線の雨が降ってきた。

機体を左へすべらせた。

火線は右へそれでゆき、同時に、頭上すれすれに

一機の ZERO が飛び過ぎていった。

「エイモリ！ 射て。射て！」

ハザウエイはさげんだ。

だが、後部座席の機銃は沈黙したきりだった。

ハザウエイはむりに首をねじ曲げ、背後をふりかえった。

後部座席はからっぽだった。

エイモリだけではない。七・七ミリの二連装旋回

機銃も消えていた。

銃架にでも ZERO の直撃弾をくらい、むしり取

られた機銃といっしょに、エイモリの体も空中へ持

ってゆかれたのだ。

高度は一〇メートルぐらいだった。もはや高度計

もきかない。

水と火と煙と爆発をかくぐってハザウエイのド
ントレスは飛び続けた。

右にも左にも日本海軍の大型艦がいて、両側から

ホースで水をあびせるような水平弾幕をたたきつ

てきた。

前方で彼らの大型空母が火柱を吹き上げて傾いて

いた。

その向うにも沈みかかっている空母が一隻いた。

そのどちらかが、自分がねらったものに違いない

が、急降下から引き起して離脱したはずなのに、そ

のねらった目標がどうして前方にいるのかふしぎだ

ったが、今そんなことを考えているひまはなかった。

頭の上を黒い機影がかすめた。

思わず首を引つ込めた。

デバステーターが一機、火だるまになって海面に

突っ込んでいった。

海面に触れたとたんに、デバステーターは陶器の

ようにばらばらになって飛び散った。

エンタープライズ搭載の第六雷撃飛行中隊の一機

だった。

つづいてまた一機。もんどり打って海面に激突した。グラマン F 4 F だった。

V F - 3 と黄色い文字で胴体に書きこんだワイルドキャット 艦上戦闘機は、自分がまき散らしたガソリンの被膜の中で発火した。

人の形をしたほのおの塊が操縦席からころげ出し、主翼の下の方の海へ落下し、すぐ見えなくなった。

前方の空母は艦尾から沈みつた。

駆逐艦が一隻、沈んでゆく空母に横付けするように接近し、海面に浮いている水兵の救助に当たっていた。

その上を弾丸のように飛び越え、輪形陣の外へ出た。

まだ機銃の弾丸が追いかけてきた。

逃げた。逃げた。逃げた。

突っ込んでゆく時に前方からあびせかけられる敵弾は少しもおそろしくないが、攻撃が終って、背後から追いかけてくる弾丸はおそろしい。神に祈りな

がら、必死に逃げるだけだ。逃げきるまでの間、つぎの瞬間に、敵の弾丸が機体の尾端から飛びこんできて胴体の中を貫通し、搭乗員をくし刺しにしてしまふような気がする。あるいはまた、真下から座席をつらぬき、尻の穴から脳天までつらぬいてゆくような気がする。

神さま！ 助けてください！

日頃、教会のとびらを押したこともないのに、ハザウエイは夢中でさげんだ。

前方から ZERO が突進してきた。

両翼の前縁からさび色の閃光が噴出した。曳光弾が投網のようにハザウエイのドントレスを押しつつんだ。

風防が吹き飛んだ。

右翼が音もなく後方へひるがえっていった。

片翼になったドントレスは、高く高く水しぶきを上げながら海面を滑走した。

一九四一年十二月八日。日本海軍の、航空打撃力

をもつておこなわれたハワイの真珠湾攻撃は、それまでの、太平洋における日本・アメリカ両海軍の力のバランスをいっきにくつがえした。

アメリカの太平洋艦隊主力は壊滅し、同時におこなわれた日本軍の中部太平洋地域に対する全面的進出とともに、アメリカの太平洋正面に対する防衛線は極めて稀薄化し、無力化してしまった。

その頃、大西洋ではUボートを主体とし、それに強力な通商破壊艦を配したナチス・ドイツ海軍が、アメリカからイギリスへ送られる龐大な量の軍需物資の流れを断つべく、猛威をふるっていた。壊滅したアメリカ太平洋艦隊の穴埋めに送られるべき艦隊はどこにもなかった。

連合国の首脳部は濃い憂色につつまれた。

とくにアメリカは、日本軍の侵攻の前に、刻々と失われつつあるマレー半島。フィリピン。オランダ領インドシナ。イギリス領ボルネオなどの防衛もさることながら、アメリカ本土の防衛戦略の再構成に必死の努力を傾注しなければならなくなった。

もともと、アメリカ陸軍には本土防衛戦略というものとは全く存在しなかった。

東西に大洋をひかえ、陸地づたいに他国の脅威というものを持たないアメリカでは、陸軍の任務は、せいぜいパナマ運河地帯を、南米諸国の生み出す反米ゲリラから守ることぐらいしかなかった。

第二次大戦が始まって、なおアメリカの、ほとんど唯一ともいうべき政治哲学であるモンロー主義が、アメリカの基本戦略に奇妙な、かつ、かなり重要な影響を与えていたともいえる。

陸軍に期待しないアメリカ国民も、海軍には全面的に信頼を寄せ、国防の第一線として大きな期待を寄せていた。

アメリカ海軍にとって太平洋における国防の第一線は、ハワイ諸島とミッドウェイを結び、南はクリスマス島。北はアラスカのベーリング海峡にのぞむアレウト列島を結んだ線と考えられていた。

この戦略防衛線は日付変更線の東側であり、アメ